

牧師 山本護 司式 青柳明美 奏楽 山本恵美

前奏	黙想	祈禱	
讃美歌	26 ころを傾け	讃美歌	532 ひとたびは死にし身も
祈禱		献金	
信仰告白	使徒信条 566	讃詠	547 いまささぐるそなえものを
聖書	コヘレトの言葉 12:7	黙禱	
	ローマの信徒への手紙 8:26	主の祈り	564
讃美歌	503 はるのあした	頌栄	539 あめつちこぞりて
説教	『聖霊はうめく』	祝禱	後奏

「あの人はクリスチャンらしい」という言葉を聞くことがある。善き人格、また融通の利かない堅苦しさも含んでの印象か。ただこんな気はするかな。キリスト者にはえも言われぬ「明るさ」がある。これは、自分の無知や弱さやみっともなさを、認めることのできる明るさではないだろうか。

「被造物は虚無に服している(マ8:20)」。人間も自然も「共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っている(8:22)」。また自分が「善をなそうという意思はあるが、それを実行できない(7:18)」ことも知っている。私たちがこのような被造物であり、こうした人間であることを自覚できるところが、キリスト者らしさではないのか。世の理想や社会の幻想から自由になり、率直に小さいまま、素朴に欠け多きままで然りと言えるゆえに、私たちは自然で、どことなく明るい。

キリスト者は、無知や弱さやみっともなさを抱えたまま開き直っているのだろうか。そうではない。私たちは現実から幻想へ逃避せず、また現実を肯定したまま、そこに留まっているわけでもない。

「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださる。わたしたちはどう祈るべきかを知らないが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる(8:26)」。弱さに加えて、どう祈るべきかさえ、私たちは知らないのだ。だが弱く、的外れに祈る「そこ」で聖霊に執り成される。

堂々とした高踏的な祈りが、訥々とつぶやく祈りに勝るだろうか。敬虔で染み入るような祈りが、言葉拙い未熟な祈りに勝るだろうか。そんな上手いか下手では決してない。「“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」がゆえに、私たちの祈りは必ず「聞かれる」のだから。

秋の陽に照らされた光景のごとく、一連の御言葉には影と光のコントラストがある。影は「被造物は～共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている(8:22)」こと。そして光は、被造物も人間も「“霊”の初穂をいただいて神の子とされること、体の贖われることを、うめきながら待ち望んでいる(8:23)」こと。同じ「うめき」でありながら、片や絶望の影、片や希望の光。聖霊の「うめき」と響き合う人間のリアルな感覚が、くっきり対照的に描かれる。光を得て、影もまた感謝すべき恵みだと気づく。

聖霊の響きには影と光が伴い、それゆえ形や色が世に現れる。「御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に(聖霊が)働くということ、わたしたちは知っている(8:28)」。本当にそうなのか、と思うだろう。こんな理不尽が、こんな不運が、こんな辛苦が「万事が益」なのか、と。私たちがどう判断しようとも、どう分らなかつても、遭遇した現実がどれほど暗い影であろうとも、その影は恵みの光に連続して、聖霊が「万事が益となるように共に働く」。それほど聖霊は私たちに近く、祈りを失った弱い私たちそのものになって、「うめきをもって執り成してくださる(8:26)」。

「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る(コヘレト 12:7)」。私たちは「“霊”の初穂をいただいており、神の子とされ、体も贖われ(マ8:23)」、やがて死の時が来れば、命の与え主である神の御許に帰る。その時まで、聖霊のうめきで執り成され(8:26)、「御計画に従い、万事が益となる(8:28)」よう仕えていく。この秋風景の影と光を横断するように、奇跡的に美しい諧調の中を進める所まで。

私たちがであろうとされる聖霊のうめき それが私たちのうめき うめきは十字架のキリストのもの  
個性や能力のような表層では捉えられまい 私が立ちあがって来る人間の根で響いている うめき

9/25の礼拝説教は長崎哲夫牧師にお願いしています。9/27(火)10:00~11:30 甲府聖研(山梨 YMCA)、  
9/28(水)11:00~12:00 聖研(集会所)。牧師の動き:9/26 山梨英和大学で懇談会、午後は分区教師会。

礼拝堂・集会所の住所:408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ:408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。